
セックスと優男

いっしゅ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セックスと優男

【Nコード】

N0675P

【作者名】

いつしゅ〜

【あらすじ】

隣の家に引っ越してきたばかりの女の人とセックスしてしまった。ついに童貞脱却を果たした主人公には、これからどんな生活が待ち受けるのか？『恋のあり方』をテーマにした恋愛小説です！

第一話　むっつりと優男

子供の頃は、テレビとか本に限らず大抵のエッチなものを敬遠してきた

多分親の教育的にそういうものはいけないうて教わってきたからなんだろうけど、とにかくその存在自体を否定して認めてはいけないうものと理解して、ずっと長いこと遠ざけてきていた

自分が覚えている中の子供に聞かれたら困る微妙な質問は、俺の場合は「せつくすって何？」といった直球なものだったと記憶しているのは笑い事としても、アニメとかで女の人が艶かしいシルエツトとか女の子の変身シーンとか、或いはエッチな言葉を使っていたってそれだけで拒絶してきたのだから、我ながら何て融通の利かないガキンチョだったのだろうと思う

せめてもう少しでも柔らかい脳みそをしていれば、その分マシな人生（二十歳で人生って表現もどうかとは思うが）を送る事が出来ていたのかもしれない

そんな頑なとも言える生き方の中で、初めて夢精してしまった日には、そりゃー驚いたもんだ

「この歳でお漏らし!?」なんて起き抜けに眩暈を起こしてしまっ
たし、何でおしっこがこんな白くてしかも妙に生臭い匂いなんだ？
とかつて疑問に思う程度の知識しかなかったわけで（後々それが生

理現象であることを知って男って変な機能がついてるんだなと思っ
た）、素で病氣かなんかじゃないかと疑ってしまっただけである
中学に上がってからエロ敬遠傾向には名残があり、さすがにアニ
メ程度で拒絶反応を示すことはなくなっただけ、周りで繰り広
げられる男子トークにはほとんど嫌気が差しているくらいには抵抗
感を抱いていた

正直よくもまあ人前で、しかも女子がいるその目の前でそんな話が
出来るもんだと軽蔑さえしていたくらいだったのだ

．．．けれど、それはあくまでも表面上の話

普段はあいつらは一体何が面白いんだろうって斜めから見ながらも、
その実やつぱり俺も男の子で、影では女体には人並みくらい或いは
それ以上には興味津々だったし、深夜のエッチなテレビを見るのも
ほぼ日課になっていた

一言で言えばむっつりスケベなわけだ

まあ、俺と同じ人種は他にもいるだろうし特別なことでもないわけ
だが、どうも思い出すとこの頃にはすでに『むっつり』ってのが悪
口かからかう意味合いにはなっていたように思う

ついでに思い出すならば、初めて手にした（拾ってしまった）エロ
本は緊縛モノの写真集で、テニスボールやらラケットやら、はたま
た体育用品やらを活用した、まあこう何というか、初めて手にする
ものとしてはややアブノーマルっぽいものだったように思えなくも
ない（今は好きなジャンルだけだ）

ともかくそんなこんなで密かな劣情を抱いていた中学時代も過ぎ去って、寒々しい高校時代、さらには大学生・・・つまり現在に至るわけだが、それだけの時間が経ってもむっつり回路は基本的には相変わらずである

人前でその手の話をするのも態度をあけっぴろげにするのに抵抗があるし、自分の趣味傾向を友達連中に話すつもりも毛頭ない

そんな話をするくらいなら個人的には大人しくゲームの話でもしていた方が気分的に断然に楽なわけだ

そりゃ僕だって別に硬派を気取っているわけじゃないし、当然女に興味が無いはいはずもなく超アリ

毎日最低一回は又いているし、親に隠れてAVを鑑賞していたことだって間々あるし、普通に彼女は欲しかったし、あわよくば女性教師とねんごろになることさえ考えていた

とまあずっとそんなだったから、きつと多分大人になるまでは、俺ってこのままなんだろうなとすら漠然と思っていたわけだ

・・・一応、今日までは

「どう？・・・気持ちよかった？」

ベッド上の隣でうつぶせになっている彼女が、俺にそう尋ねてくる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

けれど、俺はその問い対して何の言葉も吐く事が出来ないしその元

気も・・・一箇所以外はない

もちろん恐ろしく気持ちよかったし、中に入っている時のねっとりとしたような、その蠢いているような感覚には歯を食いしばらざるを得なかった

これが挿れるってことなんだ、と感動さえ覚えた

もう単純にオカズを利用すつよりも十倍以上の快樂だったと言える言葉を重ねてしまっが、世の中にこんな気持ちよさがあっていいのか？ってくらい衝撃的な出来事だった

なのに、俺の思考はそんな本能煩惱よりも現状が理解できない方にやや傾いている

というよりは、頭の中で理性的なことを考えていないと、自分の中の何かが決壊してしまうような心持になっていた

とにかく完膚なきまでにイカされてしまった身としては、今までの俺の生き方と今の敗北感とを含めて、とても彼女に何かを答えることは出来なかったのだ

「ふふ・・・」

そんな無反応の俺を見てなのか、彼女は俺を見て楽しんでいるような微笑を浮かべている

もしかしたら気付かぬうちに悔しそうな表情でも浮かべてしまっていたのだろうか？

だとしたら、尚更の敗北感だ

せめて一矢くらい報いてやりたい気持ちに苛まれてしまう

でも．．．

それにしても俺は、何だっで大して知りもしないような彼女と、その彼女の部屋のベッドで、二人して裸で横たわってしまっているのだろう

確かたった30分前までは、俺は女とも女の体とも縁もゆかりも繋がりの中の字もないような生活をしていたはずなのに．．．

俺の家は一戸建てである

木造二階建て築5年くらいのよくある感じの一軒家

部屋分けとしては3LDK+ウォークインクローゼット

一階がダイニングと両親の和室、それと中々に大きめの洋服収納

でもって二階の二部屋がそれぞれ俺と姉の部屋として配されている

ちなみに、ここに引っ越してくる前はずっと狭い2Kのアパート住まいだったのだが、それがいきなり2倍以上の広さを有する戸建てを購入したっていうのだから、親父とお袋の頑張りには素直に感嘆してしまう

だからこれで、もう少し俺の部屋がマシだったのなら本当に何の文句もなかったに違いない

逆に言えば、俺は今の部屋に不満があり、言ってしまうと俺の部屋は日当たりが悪いのだ

灰色の世界くらいには言っていいたいと思う

というのも真正面にはお隣さんの家があつて、7割ほどがお隣の壁と窓に塞がれているような有様なのだ

はつきり言つて気持ちちが沈んで仕方がない

対する姉の部屋は南向き日当たり良好のしかも広い部屋で収納も俺の部屋の倍というあからさまな好条件

そんな歴然な差があつたものだから、この家に引っ越してきた当初は当然のように散々抵抗していたものである

けれど結局、お姉さま権限発動により今の湿気っぱくて薄暗い部屋に宛がわれてしまうことと相成つた

全く持って負け犬人生どこまで続くつて思つてしまつたくらいだ

ともかく俺はこうして、ほぼ常時明かりをつけていなければならな

い部屋で暮らす羽目になったのだった

最初に気になったのはお隣さん・・・だったのだがお生憎様

魅惑のお隣さんは空き家だった

家的にはそこそこ古い感じで、規模的にはウチの家を同じくらいの大きさがあり、どうやらウチの家族が住み始めた時から、或いはそのずっと前から誰も住んでいる気配はなかったらしい

だから、窓向こうのカーテンもいつも締め切られたままだった

欲を言えば、テレビやゲームでよくある隣の女の子とのドッキリ遭遇を多少期待していたのだが、そんなマンガやアニメの話は早々あるものではないわけだ

だが逆にむさくるしい男の笑い声とも縁はなかったわけで、住めば都の理通り、俺は普通に湿気っぽくも穏やかな毎日を送ることに成功していた

実際、一人部屋というのは初めてだったこともあり充実のオナニーライフを満喫していたのだ

・・・が、けれどそれはすでに一ヶ月前までの話

つまり今は、もうすでに人が住んでしまっているわけだ

最初は正直うんざりしていた

だって今までずっと何年も静かに過ごしてきたのに、これからはお

隣さんを意識しなきゃならないなんて面倒くさいことこの上ない

ただでさえ姉貴の鬱陶しいちよっかいがあるにも関わらず、この上お隣さんの影を気にしなければならいなんて、本気でやってられない話だ．．．なんて思っていたのが29日前のお話

我ながら現金なものだとは思うが、仕方ない

だってだって、男の子だもん

てなわけですまりどういう事かと言えば、俺のお隣の部屋には何と念願の女の人が入ってきてくれたのだ

案外マンガやアニメの話つてもあるらしく、事実は小説より奇なりとはよく言ったものだと感じてしまう（ってこれだと使い方が違うか？）

だとしたらもしかしたら或いは、窓を開けておはようイベントとかはたまたカーテン開けたらイヤ〜ンなお約束とかまであるかもしれない、とか考えていたのだが．．．

いや、本当に事実は小説より奇なりとはよく言ったものである（今度を使い方も合っているだろう）

何しろ今日俺は．．．

もし良かったら、私とセックスしない？

と、何となく窓を開けて、この一ヶ月で初めて彼女とタイミング良く目が合った瞬間に誘われていたのだから

第二話 初エッチと優男

幾分か訂正がある

前回俺は、まるで彼女とは初めて会ったような言い回しになっていたが、それだと微妙に誤植がある

何故なら俺と彼女とは一応初対面ではない

確かに初めて目が合ったというのは本当だが、それでも一応お隣さんなわけで面識くらいはさすがにあった

そりやもちろんツーカーな仲なわけはないけれど、お隣さんとして挨拶くらいはちゃんとしていたし、俺が朝、大学に向かう際にバツタリ出くわしたなんてこともあって簡単な世間話くらいはしていた

だから彼女がOLであることも知っていたし、最近仕事を面倒がつているのも聞かされたりもした

そんな普通に自己紹介をして、彼女の名前が、柳沢なぎさ（やなぎさわなぎさ）さんであることも分かっていた

ついでに言えば、かすかに鼻先に触れた、彼女の甘い匂いだって覚えてる

有体に、そして低俗に言えば、俺は彼女に僅かには好意を抱いていたんだと思う

まあだとしても、さすがにいきなり肉体関係を求められたのには驚

いたけど

．．．って、いい加減俺の横道遠回りも酷いか

いつになったら核心部分に入るんだよって感じだ

きつとどうせみんなもその大事な部分が知りたいんだろうしさ

ってことで、改めて順を追っていこう

ん？やっぱ引つ張ってると思うか？ああ当然だ引つ張ってるも

だって俺的にもまだ状況が把握できてないからな

ともかく今日の俺は大学の講義をサボって家にいることにしたんだ

何故かと言えば社会学講師のおっさんは声が小さくて聞き取りづらくて行くのが面倒だったから

単位はレポート提出なので大した問題ではないのは分かっていたし

てな訳で、今日は朝からずっと家にいた

でもそれだとあまりに時間を持て余してしまったもんだから掃除を始めたんだ

それに無性に床の汚れが気になってさ

だから換気も兼ねて窓を開けたら、そこには彼女．．．柳沢なぎさ（やなぎさわ　なぎさ）さんが窓を開けたままで．．．

「ふうううゝ．．．」

「はふあっ．．．!？」

回想の途中で突然耳元に息を吹きかけられて、左肩を竦めてしまっ
しかもゾクゾクつときたもんだから妙に情けない声を出してしまっ
ていた

でも急にそんなことされたら誰だって腰砕けになってしまうと思わ
ないか？

「もう、何をさっきからボケゝってしてるの？エッチした後でその
まま女の子をほっといちゃダメでしょ？」

見ると、お隣さんは気だるげな笑みを浮かべたまま、少しだけ細め
た瞳で俺を見つめてきていた

．．．と思ったら急に口元を近づいてきてキス．．．と見せかけて
はむっ

「ほわっ!？」

ゾクゾクってきたよ！背中ゾクゾクって！

「あ、耳感じやすいんだ」

「や、やめてくださいって!」

俺は必死の抵抗をしようとして、でも力加減が分からなくて柳沢さんの肩すら掴めず、そのまま起き上がってしまう

さっきまで彼女の全身を隈なく弄っていたのだけど、素になってしまつと恥ずかしいやら堪らないやらで堪らなくて堪らない

「何よ、これくらい別にいいじゃない。たっぷり堪能したんでしょ? ならちよつとくらい弄ばれなさいよ」

「もてあそ．．．って．．．」

うわダメだ

どうにも彼女の言葉の言い回しが俺の今までの日常とはエロい違和感がありすぎて、もうそれだけで全身が熱くなってきてしまう

それに完全ヌードな女の人が自分の隣でうつぶせに横たわっていて、しかも俺だけが起き上がっているこのアングルからだど、ど、どうしてもお尻がつ．．．すべすべなお尻が丸見えで．．．っ!

「あらら、また大きくなって反り立っちゃってる。エッチな子ね」

「うあっ!?!」

思わず膨れ上がっている局所を両手で隠してしまう俺

何と言うか情景反射・・・じゃなくて条件反射だった

もう何と言うか情けなさここに極まりである

「ふふふ・・・」

なのに、そんな俺の醜態を見ても彼女は妖しく笑って・・・一言

「もう一回、する？」

と、俺の顔の側へと自分の顔を寄せてきていた

あゝ、いやもう・・・話がドンドン脱線していくというか、本題にも入ってないのにダラダラしちゃって、その・・・申し訳ない

コレでも俺は本気で申し訳ないって思っているんだ本当だぜ？

だけど、こればかりは許して欲しい

何と言っても俺は初めてだし、お相手にイニシアチブを握られてしまうのは当然のことなんじゃないかとも思うし、加えてAVの中だけ見たことのないようなプレイを体験できるとなれば、それはもう濡れ手に泡・・・じゃなくて粟なわけで抗いようのない本能な

わけで据え膳食わねば男の恥なわけで、だから、とてもじゃないけど立里ト貝な俺には何一つ、止めることなんてできなかったんだって本当にさ

さつき部屋の窓を開けたらシースルーな彼女が眼前で頬杖をついていたことに顔を赤らめてしまったのも

何故か薄く妖しげに微笑まれてわけが分からなくなってしまったて気付けば股間の膨らみを隠していたことも

しかも突然セックスを求められて、なまじ頬を撫でられちゃった上に女の人の甘い匂いに参ってしまったのも

目の前の光景に自分の欲望に歯止めなんて掛けることもせず、窓から窓へ飛び移ってしまったのも

入れるのも出すのも、もう何から何まで本当にとてもじゃないけど、止めるだなんてそんなこと、できる余裕はなかったんだって

だからちよつとくらい枷が外れちまっても、それは仕方のないことだっと思わないか？って、思わない？

いや、ここは思ってくれよ頼むから

「君、好きな子はある？」

合計3回ほどの行為が終わった後で、なぎさんはブラジャーを付けながら俺にそう聞いてきた

「え？」

俺は下着を着けるとこは見られたくないというなぎさんの提案により、不可思議に思いながらも背を向けていたのだが、思わず振り返ってしまう（なぎさんとも、後ろを向いていて助かった）

「だから好きな子、恋人、愛人、ラマン」

「いや、前半も後半もいませんけど」

今まで凍えるような灰冬を過ごしてきたのだ

恋人はもちろん、妾もセフレもいるわけがない

「ホント？好きな子も？」

俺の答えに下着は付け終わった彼女が少しだけ驚いたようにして振り向いてくる

「・・・ま、まあ」

彼女のそんな表情の意味を図りかねて（あ、いや意味なんてないんだろうけど）、俺はついつい目をそらしてしまう

それはなぎさんを含めてに気になった子くらいはいたけれど、今

は生憎と『好き』とまで言える相手には恵まれていない

そんな相手が、こんな俺の前には現れたことなんて一度たりもありはしない

でも．．．

だけど今は．．．どうなんだろう

なし崩しにとはいえエッチなんてしちゃって、その間にはファーストキスまでしていて、すごく、気持ちよくて．．．喘ぐ女の人を可愛いつて思っちゃったりして．．．

「好きな人、か．．．」

俺は別に今まで頑なに操を守っていたわけでもない

表面上エッチなことを敬遠してきたとはいえ、普通に彼女は欲しいと思っていて、やっぱりエッチなことをしたいとも思っていた（実際そうになりたい相手も今までの人生の中で2人ほどいた）

ただ、やっぱりキスもセックスも、好きな相手とするべきだっていう考えは今も持っていて

「マサトくん」

なのに、もう済んでしまったとはいえ、どうにも今の状態に抵抗感があるのは否めない

「正人くん」

もちろんなぎささんとの事を後悔なんてしていないけれど、でも何
て言うか・・・俺はなぎささんのことを一体どう

「正人くんっ」

「え？」

突然の声に、一瞬誰が呼ばれたのか分からなくなってしまう

マサト？正人というのは・・・

ってアホか俺は、正人ってのは俺の事だろうが

前に自己紹介し合っただろうが

「こらこら、人の話はちゃんと聞かないとダメだよ？」

「え？あ、いや聞いてましたよ聞いてました。えっと好きな人はっ
てことですね？」

「いやもうその話終わってるし」

「え？」

あれ？いつの間に？

でも確かに、なぎささんも下着の上にもう例のシースルーな・・・
ネグリジエ？を着込んでるし

てか、何でそんなスケスケを着てるんだろう？第一冬とか寒くないのだろうか？

「まったく、君って子は本当に耳が弱いだから。もし好きな子の前でもそんなじゃあつという間に嫌われちゃうよ？」

「え、あ．．はい、すみません」

しかも一瞬にして今までしていたなぎささんへの願望妄想を最初の段階で碎かれてしまった感じだ

まあ実際、こんな長い時間一緒にいるのが始めてなわけだから、好きかどうかなんてありえないんだろうけどさ．．．

「なんか君．．落ち込んでる？」

「え．．いや、そんなわけないっすよ？」

思わず一瞬目を見開いたようになってしまっが、そんな彼女の疑問を手を振って否定してみせる

まさか初めての人は好きな人．．なんて古風っぽい、しかも俺個人として情けない話をするわけにもいかないし

「そう？ならいいんだけど．．あ、でもそうだ。今更だけど、ちよつとだけ、聞いてもいい？」

「あ、はい。何でも」

でも何だろう？

あ、今日は大学はどうしたの、とかか？

「その、さ．．．ちょっと聞きにくいことなんだけど、ね？」

「？．．．はい」

「君．．．初めて、だったよね？」

「っ！？」

ハ、ハジメテ？

初めてってのはつまりそういうことだよな？

でででも、何故分かる？何故分かった？

「ま、まあ、そくだよねえ．．．」

そんな俺の驚き顔を見て、なぎさんは「あちゃ〜」みたいな痛そうな顔をしている

って、自爆っ！

「えっと〜、じゃあもう一個いい？」

「．．．はい」

くそっ、もう絶対顔には出さないぞ

「いや、私ももしかしたらもしかしたらスル前から多分そうじゃないかな」とは思っていたんだけどね。でも見た目も結構今時の子だし、だから経験なんてとっくの昔にしているって思っちゃって・・・その、ね？」

「は、はあ・・・」

言ってる事は、まあ分からないでもない

つまりは俺の初めてを取っちゃってごめん・・・てことなんだろうけど

ただ、謝られる程の事かどうかは微妙な気がする

んー、やっぱり男と女では初体験についての価値観は違うのかもしれない

「はあ・・・でもまさか本当に童貞くんだったなんて、ホント失態だなあ私・・・」

「うぐ・・・」

童貞って言葉には、どうにもまだ拒否反応があるな

そりゃ確かに事実なんだけど、何となく言葉そのものを否定したい感がある

正直自分でもよく分からない感覚だ

にしても、いつの頃からエッチしていないことがマイナーで情けな

い男のステータスになっていたのだろう

思い返してみても、そのタイミングがよく分らない

まあ、いつか．．今の俺は、一応は童貞でも素人童貞ってわけでもない．．ってことになったんだろうから、多分

「でもその、なぎささん？なぎささんが謝らなくてもいいですって俺は別に気にしてないですし．．というかむしろ嬉しかったですし．．てかそもそも俺の方こそ本当にごめんなさい。こんな急に流れのままにしちゃったりして．．」

本当にそうだ

例え誘われたような感じだったからって、あの場面で、俺は本当は断るべきだったんだ

所詮俺となぎさんは知り合いでしかないのだし、それなのに関係を結ばうだなんて、そんなの本当はあってはいけないと思うし

「．．ううん、君は悪くないよ」

なのになぎさんは、とても静かに、俺を庇ってくれているようだった

逆に自分が深く深く．．とても深く、後悔しているみたいに

「あゝあゝ、不安定だったのかな、私」

「．．不安定？」

もしかして、何か問題があったとかか？なんてことを聞こうとする前に

「え？ああ、気にしないで。別に、大したことじゃないから・・・」

なんて、とても嘘くさいような気がしなくてもない風に言って、ちよつとだけ寂しそうな顔を浮かべていた

・・・ここはきっと、何も聞かない方がいいんだろう、多分

「あの・・・じゃあ一つ、別の事聞いてもいいですか？」

俺はその空気を変えたくて、聞いてみたかったことを尋ねることにする

なぎさは「いいわよ」と言ってくれ、だから俺は、内に秘めている自信の無さを誤魔化したいという気持ちの表れでもあったのだろう、この質問自体の意味の無さを理解しつつもその問いを訊いてみた

「あの・・・気持ち、良かった、ですか？」

「え？」

なぎさんは少しだけ虚を突かれた風になって、でもすぐに今度は微妙な顔を浮かべる

「ほらえっと、僕って初めてだったりしましてだから、女の人を満足させられたかどうかが気になっていてやっぱり、男としてはお相

手にも気持ちよくなつてもらいたいと言いますかそうあるべきではないかと言いますかなので．．．もし良かったら、教えて貰えないでしょうか？」

俺は何をこんな焦つてまで、そして何を聞いているのだろう

それに気のせいか、この質問をしている時点でかなりの敗北感が付き纏わないでもない

やっぱり、こんなこと訊くんじゃなかったと思つてしまう

「ふふふ．．．まったく君つて子は、全然初めてのくせして．．．」

「あの、すみません．．．」

何がすみませんなのか、よく分からないけどつい謝っていた

どうして俺はこつも弱腰なんだろうか

けれど、どうやらなぎささんは問いに答えてくれるらしく、ついついごとくと喉を鳴らしてしまう

「んゝ、そうねえ．．．」

「は、はいっ」

これは微妙に緊張の瞬間だ

ある意味男の甲斐性に対する審判と言つてもいいかもしれない

「ふふ．．．うん、気持ちよかったよ」

「あ．．．」

だから俺はその答えにホッとせざるを得なかった

つまりそれなりにできてたってことなんだろう。良かった．．．

「ちょっとだけね」

「う」

って、ここでそんな期待させるようなこと言いますか？

マジ今の俺の安心感を返せ！

そりゃ、下手くそって言われるよりはマシだけど

「ほらほら、へこたれないの。まだまだこれから機会はあるんだから精進なさいな」

「は、はあ．．．精進すか」

こんなのどうやって鍛錬するかなんて知りませんよ

てか、どんな会話だよこれ

自分で振っついてないんだけど相当のセクハラ発言だよな？

「ん、でもそうだね。君のその精神は、大事にしなよね？」

「はい？」

その精神？どの精神？セクハラ精神ってこと？いやまさか・・・

あ、もしかして聞き違いで精子だった？

精子を大事にしてこれからも使えって事？

ってそんなバカな

それこそセクハラ精神だ

「だから自分だけじゃなく、女の子もちゃんと気持ち良くさせよう
って精神をだよ」

「・・・・・・・・はい？」

なんだそりゃ

普通に意味分かんねえって

「つまり、世の中自分勝手な男が多いってことだよ。ホント嘆かわ
しいよね」

「は、はあ・・・」

自分勝手？

いや、今日の事とか、俺も結構自分勝手な方だと思うけど・・・

全くもって、年上の女の人の思考はよく分からないものだ

突然エッチに誘われるし、しておいた上で俺が謝るべきところを謝ってくるし、今回のことを不安定で片付けようとするし、それでも年上ぶろうとしているし、俺じゃとても頭がついていかないっての

これなら社会学の講義の幾分か楽だったに違いなくらいだ

もちろん、今日大学に行かなかったのは完璧な正解だったと思うけどさ

ともかくその日から、俺となぎさんは、それこそマンガやアニメみたいな窓向かいのお隣さんになったわけだ

はてさて、これから一体どうなっていくんだろうね

ともかく色々期待しないように暮らしておいた方が無難かな、多分

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675p/>

セックスと優男

2010年12月30日07時11分発行